

公表

事業所における自己評価総括表

| | | | |
|----------------|--------------------------------|---|-------------|
| ○事業所名 | こども発達未来スタジオippo木原教室 放課後等デイサービス | | |
| ○保護者評価実施期間 | 令和8年2月1日 | | ～ 令和8年2月28日 |
| ○保護者評価有効回答数 | (対象者数) | 5 | (回答者数) 5 |
| ○従業者評価実施期間 | 令和8年2月1日 | | ～ 令和8年2月28日 |
| ○従業者評価有効回答数 | (対象者数) | 4 | (回答者数) 4 |
| ○事業者向け自己評価表作成日 | 令和8年3月1日 | | |

○ 分析結果

| | 事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること | 工夫していることや意識的に行っている取組等 | さらに充実を図るための取組等 |
|---|--|--|---|
| 1 | お子様が落ち着いて、主体的に活動できるシンプルで清潔な環境 | 掲示物を最小限にし、色調を落ち着かせることで、感覚過敏を持つお子様がリラックスして過ごせる空間を維持している。 | 全体としての低刺激化に加え、個々の特性（より遮蔽が必要な子、逆に刺激が必要な子）に合わせた「カームダウンエリア」の質的向上を図る。 備品の老朽化チェックや配置の見直しを定期的に行い、常に「整った状態」をブラッシュアップし続ける仕組みを作る。 |
| 2 | 自立に向けた「見守り」と「考える機会」の提供 | 活動内容や道具を自分で選ぶ場面を設定し、自己決定の経験を積み重ねられるよう支援している。 答えを教えるのではなく、手がかり（写真や図）や最小限の助言によって、成功体験に導くよう工夫している。 | 「できること」と「できそうなこと」の境界線をより正確に見極め、個別の支援計画に基づいた適切な難易度設定を強化する。 介入の引き際を判断するための「声掛けの技術」に関する研修を実施する。 |
| 3 | お子様の「やってみたい」を引き出す、成功体験重視のプログラム | 結果だけでなくプロセス（努力や工夫）を具体的に褒め、事業所全体が明るい雰囲気となるよう努めている。 お子様の好きな活動を取り入れつつ、五感（前庭覚・固有受容覚など）を刺激する遊びを通して、自発的な参加を促している。 | 楽しさや達成感を主観だけで捉えず、お子様の表情や参加態度の変化を記録・分析し、プログラムの有効性を検証する。 個の達成感を集団（他者）との関わりの中での喜びに繋げられるよう、協カプレイヤールールのある遊びの展開を充実させる。 |

| | 事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること | 事業所として考えている課題の要因等 | 改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等 |
|---|--|---|---|
| 1 | 刺激が多い場でも普段通りの力を発揮できる「汎化・応用」の機会が不足している。 | スタッフによって「シンプル」の基準が異なり、整理整頓や環境設定に微細なバラつきが生じ、利用者様に混乱を与えている可能性がある。 | 個々の特性に合わせ、あえて少し雑音のある場所で活動する時間を設けるなど、実社会に近い環境でのトレーニング（汎化）を検討する。 「何もない」だけでなく「何があるか一目でわかる」視覚的構造化をスタッフ間で再定義する。 |
| 2 | 自立度を高めるための「見守り」ですが、お子様の状態やタイミングによっては、その「見守り」が不安や活動の停滞に繋がってしまう懸念があります。 | スタッフの経験値により、介入すべき「適切なタイミング」の判断に差がある。特に新任スタッフにとって境界線が曖昧になりやすい。 | どの段階で、どのようなヒント（身体的・視覚的・言語的）を出すべきか、個別の支援計画に基づいた具体的な手順・補助の共通化を図る。 |
| 3 | 「楽しい」「明るい」といった事業所の雰囲気づくりには手応えを感じておりますが、その中でお子様がどれだけ成長されたかという「療育の成果」を、より具体的・客観的に伝える仕組みがまだ十分ではありません。 | 日々のプログラム作成において、楽しさを優先するあまり、本来の目的である「5領域（健康・生活・運動・感覚など）」のバランスが崩れやすい。 | 楽しさの中にある「できた回数」や「集中した時間」など、数値化できる目標を設定し、保護者へ根拠のあるフィードバック・定量的評価を導入する。 |